

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 南 和男 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

今年度の共通テストについて、1の「前文」では追・再試験「日本史A」と「日本史B」の全般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「総評・まとめ」では全体的な要望について述べる。

1 前 文

例年、追・再試験については、本試験と比べてかつてのセンター試験に近い出題がやや多い印象であったが、今年度は本試験に近い形式の出題が多く、難易度も本試験の日本史との比較では妥当であったと思う。しかし、追・再試験は毎年平均点が公表されていないため、正確な難易度の検証は不可能である。また、今年度の日本史B本試験は平均点が昨年度から下がり、地理Bや世界史Bと比べても平均点が低く、難易度が高かったと思われるが、追・再試験も本試験と同様、地理や世界史等と比べ難易度が妥当であったかが検証できるよう、平均点等のデータが公表されることを望む。

以下、それぞれの日本史の試験について検討した結果を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

日本史A

設問数は平成28年度から大問5題、小問32題となり、今年度も同様である。出題範囲は幕末期の1850年代（日米修好通商条約）以降の近代・現代、その下限は1985年（プラザ合意・円高不況）までである。なお、「日本史B」との共通問題は、大問2題で34点分となり、昨年度と同様であった。

出題形式別では、正誤問題は10題（うち正文・適文選択6題、誤文・不適文選択4題）と全体の3分の1に迫る出題となった（昨年8題）。続いて、組合せ問題は17題を占めた（昨年19題）。内訳は、正誤の組合せが6題（一昨年6題、昨年5題）、語句の組合せが2題（一昨年6題、昨年5題）、正文の組合せが7題（一昨年度5題、昨年度4題）、人物・事項などの組合せが2題（一昨年度1題、昨年度5題）である。また昨年に続き、年代配列は5題、語句の選択は0題である。出題形式の種類・バランスから見れば、一つではなく複数の事項から選ばせ、語句などの知識よりも思考力・判断力を伴った内容理解を問うことに重きを置く傾向がさらに強まったと言える。

時代別では、幕末4題（直近2年0題）、明治5題（昨年11題）、大正0題（同2題）、昭和（戦前・戦中期）3題（同2題）、戦後7題（同5題）であった。一方、複数の時代にわたる時代横断の問題は13題（一昨年9題、昨年12題）で、その時代別内訳は幕末2題、明治8題、大正8題、昭和7題、戦後4題であった。第2問を幕末・明治期のみで構成するなど、幕末期にもバランスよく出題数を充てた。また明治期については、単独での出題は減ったが、時代横断問題と合わせて全32題のうち13題で広く問われた。大正期は時代横断問題のみでの出題となった。昭和期・戦後期はともに増加の傾向で、第5問はこの二つの時代のみで構成された。昨年に続き、時代をまたぐ流れや比較における思考・判断を要する出題が意識された。

分野別では、複数分野に跨るものを含め、政治19題（昨年18題）、社会・経済19題（同16題）、軍事・外交15題（同12題）、文化7題（同5題）、混合問題21題（同14題）であった。各分野の増減は小幅で、混合問題は明確に増加した。出来事の順序に従って、あるいは各分野に絞って各大問に取り組めた過去の出題傾向と異なり、受験者が各分野を跨いで様々な知識かつ思考をめぐらせて答えることを求めている、複数事項における相関性や因果関係をも重視した学習の成果が問われた。

史資料を活用した問題は、文献11題（昨年10題）、地図・写真0題（同0題）、図2題（同2題）、表1題（同0題）、グラフ1題（同2題）、混合（グラフ・表、図・文献）3題（同1題）の計18題と今年も増加し（一昨年8題、昨年15題）、「歴史総合」などを意識した傾向と言えよう。昨年と同様に政治分野に比例して関連文献を用いた出題が多いが、用いられた史資料はどれも読み取りやすく、新聞記事や触書、地誌・市史、論考、議会の速記録・演説など幅広い種類から精選され、十分な工夫と配慮を評価したい。加えて、年代配列問題の選択文に文献史料を用いた出題もあった。ただし、それぞれの史資料が持つ歴史的意義を捉えにくい出題も散見され、問題の質に若干バラつきが感じられた。また、視覚資料を用いた出題は2題（錦絵、ポスター）に留まり、文献に頼りがちな印象が拭えない。学習者が文献とともに視聴覚資料を通して豊かな歴史像・歴史的思考力を獲得する大切さに異論はなかろう。ここでは、獲得された歴史像・歴史的思考力を本テストでどのように測りたいのか、史資料を用いた出題の質と意義が改めて問われる。

追・再試験は受験者が少なく平均点は公表されていないが、難易度から見ると概ね平易な出題であり、取り組みやすい試験であったと考えられる。

以下、詳細について述べていく。

第1問は19世紀後半から20世紀後半の日本の貿易・経済の状況について述べたリード文に関連して問われている。Aは外国貿易の開始と本位制度の採用、Bは貿易決済から見た海外政策の展開、Cは戦後の外国貿易と経済成長について扱っている。問1は日米修好通商条約に関する正文を選ぶ問題で、内容は基本的で答えるのも易しい。問2は明治期の本位制採用の変遷について正誤の組合せを選ぶ問題である。グラフと表の読み取りと基本的な知識から判別は平易で、またその読み取りから変遷の背景も窺い知れる良問と言える。問3は1890～1930年代の日本の貿易や産業について誤文を選ぶ問題である。各時期の状況に関する基本的な知識が問われたが、貿易・経済のしくみや展開の特徴を理解していれば類推によっても正答が得られる。問4は戦前期日本による植民地との貿易政策に関連する二つの表を用いて、正文の組合せを選ぶ問題である。表1では植民地の輸出額が総額に占める割合が、表2では各植民地を有する本国がわかれば答えるのはともに易しく、各表を十分に生かした出題とは言えない。むしろ、誤文の方が各表中の数値どうしを比較検討させる内容となっており、選択文の質やバランスにももう少し工夫があると良かった。問5は日中戦争期・アジア太平洋戦争（太平洋戦争）期の日本の物資や資源の確保に関わる動きについて正文を選ぶ問題である。基本的な知識・理解を試す設問であるが、正文は多くの高校生に馴染み深い教科書の本文とほぼ同表現であり、また過去のセンター試験にも類題が見られる。大半の受験者が正答以外の文の正誤を判別なしに答えられるとすれば、本問を設けた意義がいつそう薄らぐ。問4と同様の工夫を求めたい。問6は戦後期における貿易の再構築に関連する新聞記事を用いて、正誤の組合せを選ぶ問題である。史料は読み取りやすく、また中華民国（国民政府）との外交交渉に関する出題も昨今の国際情勢に照らして興味深い。ただし、中華人民共和国との貿易が困難であったことがXの冒頭にある「朝鮮戦争が継続」していたためか、史料に見られる会談の開催年（1952年）や「朝鮮動乱」の語から明確な因果関係を捉えるのはやや詰めに欠ける。史料の内容と出題文との整合性に配慮を求めたい。問7は高度経済成長期における日本の貿易環境に関する年代配列問題である。Ⅰ～Ⅲは1960・1970・1980年代の貿易環境をそれぞれ代表する出来事であり、基本的な理解を問う良問とし

たい。なお、貿易・経済のしくみやその展開について日ごろその様子を見聞きし考察する機会が多いとは言えず、大半の高校生にとって（あるいは授業者においても）具体的な理解を得るのはそう容易でないかもしれない。その点において、A～Cの各リード文はしくみや展開を簡潔にわかりやすくまとめており、近現代日本の貿易や経済を学ぶ際の良質なガイドとして活用できる。

第2問は「日本史B」第5問との共通問題で、東京に着目した時代の変化に関する会話をリード文とする。問1は幕末の年代配列問題で基本的な内容である。時期を特定しやすくなる事件名などの歴史用語を避けた記述により、易しすぎず難しすぎない難易度に落ち着いている。問2はXが史料の読解、Yが知識を問う設問となっており、いずれも適切な難易度である。問3は明治時代の外交に関する基本的な知識を問う設問である。問4は史料と絵画に関する設問で、aは天皇の東京行幸などの新政府の初期の動きが戊辰戦争と並行して行われたことを認識している必要があり、分野を跨いだ理解が問われている。bは近代に関する設問の中で、錦絵が江戸時代の文化で学習する事項であったこと、つまり開国よりも前であることに気付く必要があり、時代を跨いで必要な知識を引き出す力が求められている。dは図の説明文に関する文章で、絵画の内容とは関係がないため、図を掲載する意味が無いように感じる。図として掲載する以上、少しでもその内容にも関わるよう選択肢の文章を工夫してもらいたい。

第3問は近代日本の印刷や出版に関する博物館の展示解説をリード文とする。解説文Aは「明治期の政治と印刷」、解説文Bは「近代におけるデザインの役割」に関する文章である。問1は明治政府の法令に関連する人物と事項の組合せを選ぶ問題で、反乱とその発生地、制度とその中心人物の組合せはどれも基本事項である。問2は民撰議院設立の建白書を評した論考の内容と『明六雑誌』について正文の組合せを選ぶ問題である。論考は読み取りやすく、『明六雑誌』の特徴も基本的な知識である。両問ともに答えるのは易しい。問3は『衆議院議事速記録』（以下、速記録）及びその説明文中の空欄に適する語句の組合せを選ぶ問題である。速記録の年月日や内容から、第2回衆議院議員総選挙における選挙干渉に関する記述とわかれば、自由民権運動から初期議会の流れを踏まえて容易に答えられる。なお、空欄アに入る選択語として「統帥権」を用いた点については、速記録中の「濫用し」をともに述語とする「行政権」からの連想で考えさせようとしているが、やはり条例どうして考えさせる方がその制定の意図や背景を問う良問ではなかったか。問4は明治期から大正期にかけての日本画・洋画について誤文を選ぶ問題で、教科書で扱う範囲内として十分に答えられる。問5は明治期から戦前期（1908年～1934年）の社会の状況に関する年代配列問題である。様々な思想・運動の盛衰は各時期の社会状況を色濃く反映しているが、現代の高校生には馴染みが薄く、知識として蓄えても理解や考察は進みにくいのではないかと。思想・運動ごとの流れとともに、時期・年代ごとに横に並べてその違いや関連も見れば理解や考察はより深めることができよう。そのような意味において、単に覚えていれば解けるというだけでなく、1910・1920・1930年代の状況を表す思想・運動をバランス良く取り上げ、その時代背景とともに考えさせる質の良さを備えている。問6は犬養毅の議会演説に関して正誤の組合せを選ぶ問題である。現代語でまとめた演説の大意は読み取りやすく、朝鮮半島の情勢についての基本的な理解とともに、正誤の判別は易しい。問7は杉浦非水らデザイナーが手掛けた1920年代後半以降のポスター3枚に関する会話をもとに、正誤を判別し正文を選ぶ問題である。資料2からは、立憲政友会の歴代総裁とその時期が合致しているか、ポスターにある政党の結成時期から判別させる出題で、史資料の読み取りを踏まえた近年の出題傾向が見て取れる。資料1・資料3についての正誤はわかりやすい。以上の小問に総じて難問はなく、基本的な知識・理解をもとに取り組める点では評価したいが、ややもすると多くの受験者において高得点が期待できたと考えられる。この追試験における他の大問はもちろん、過去年度や今年度の大学入学共通テスト（本試験・追試験）で各問が備えてきた（備えている）ものと比べると、問題

の難易度や他の問題とのバランスに配慮や工夫が若干足りなかったように思える。一方、リード文や多彩な史資料（法令、論評、議会の議事速記録、政治家の議会演説、ポスター、本の装丁）は、近代日本における印刷・出版の展開を見通す概説になっており、ここから得られる学びも多い。

第4問は「日本史B」第6問との共通問題で、銅像の歴史に関する会話をリード文とする。問1は「ア」が年代の知識、「イ」が文化史の人物に関する知識問題であった。年代を正確に知らなければ解答できない設問は共通テストではあまり出題されていない印象があるが、大日本帝国憲法の発布のように非常に重要な出来事の年代はある程度覚えておくべきであろう。問2は問題文に「明治・大正期の出来事について報道した新聞記事」とあるが、問われている「報道が発表された時期」はⅠ～Ⅲのいずれも大正時代であり、紛らわしい問題文であると感じる。Ⅱに明治の内容が「十年前」のこととして書かれており、その内容がⅡの時期判断に必要であるため、問題文にもそのように書く必要があったのであろうが、Ⅰ～Ⅲのどれかは明治の出来事であると誤解した受験者もいた可能性がある。「報道が発表されたのはいずれも大正時代である」などの説明を問題文に加えるなど、表現の工夫をお願いしたい。問3は史料問題であるが、史料の内容ではなく、井伊直弼に関する基本的な知識を問う設問である。史料を読まなくても解答できるのであれば史料を掲載する必要もないため、第5問の問4と同様に、史料を掲載するのであれば、a・bかc・dのどちらかは史料の内容を読む必要がある選択肢であるとよかった。問4はa・bが史料の内容、c・dが板垣退助に関連する基本的な知識を問う設問である。問5は戦中・戦後の知識を問う設問で易しい。②と③は、「独占禁止法」「段祺瑞」が、問題文の指定する時期と異なる上に、文章の内容も誤っており、誤りの要素が二つあって判断しやすかったため、どちらかの選択肢は誤りの要素を減らしてもよかった。特に戦後の出題が少ないので、②は独占禁止法の内容を正しく書くなど、判断の難易度を上げてほしいと思う。問6はXが大正時代の基本的な知識で、Yも史料が読みやすいため解答しやすい設問である。問7は戦後の社会経済・文化を問う設問で、高度成長期までの学習で解答可能である。本試験では高度成長後の単元に関する出題もあったが、追・再試験ではこの設問が最も新しい時代に関する設問なので、石油危機後の社会経済など、高度成長よりも後の単元に関する選択肢が一つはあったのもよかった。

第5問は高校生が実施した1940年代から1970年代にかけての都市居住者への聞き取りメモをリード文とする。メモAは1930年生まれの居住者、メモBは1943年生まれの居住者からの聞き取り内容である。問1は1930年にあった経済恐慌に関して正誤の組合せを選ぶ問題で、基本的な知識で容易に答えられる。問2は敗戦後の時期の労働政策などに関する年代配列問題である。どの出来事も教科書から学べる範囲で、単に覚えていれば解けるというだけでなく、1945年から1950年にかけてGHQが労働者や労働組合をどのように方向付けようとしたのか、その変遷を踏まえても正答に至る。問3は1948年における東京都心の状況を記した文章について適文を選ぶ問題で、現代語かつ情景豊かに書かれた史料は読み取りやすい。ただ、正文以外の選択文には戦時中や敗戦後の歴史的事象がそれぞれ含まれる一方、正文は史料の記述に即しているが最も判別が簡単で容易に答えることができ、やや工夫に乏しい。問4は戦時中の生活について誤文を選ぶ問題、問5は1960年代の政治・社会について正文の組合せを選ぶ問題で、ともに基本的な知識・理解を用いて容易に答えられる。問6は1960年代から1970年代半ばの人口と農業従事者に関するデータをもとに、グラフから読み取れる内容とその解釈について正文を選ぶ問題である。グラフは読み取りやすく、基本的な知識・理解があれば正答が得られる。問7は戦時中及び1960年代の住宅に関して、間取り図や学者の回想、新聞記事から読み取れる内容について正文の組合せを選ぶ問題である。教材によって扱い方の濃淡は想定されるが、史資料から当時の具体的な状況がよくわかって興味深く、かついずれも読み取りやすい。離れた時期の間取り図を比べ、その変化の要因を窺わせる史料も踏まえて考察させる良問で

ある。本問においても概ね取り組みやすい出題が揃い、第3問とも共通して問題の難易度や他の問題とのバランスへの配慮が気になる。一方で本問は、聞き取りや回想、新聞記事、住宅間取り図など各時期にくらした人々の様子をよく伝える史資料を用いて、戦時中から敗戦、戦後期における居住・住宅をテーマに、くらしの実相や人々の考え・思いが見て取れる内容が多く、テーマ史の例として取り組みやすい問題と言える。

日本史B

「日本史B」について、設問数は大問6題、小問32題の構成で、今年度の本試験や昨年度の試験と同様であった。リード文は生徒の会話や学習活動に関するものが中心であることも例年どおりであった。扱われた史資料は例年どおり史料が大部分であったが、今年度は絵画を扱った設問が4題あったことも印象的であった。一方、本試験や昨年度の追・再試験にあった、グラフ等の統計データの読み取りはなかった。

出題範囲は原始（縄文）から現代（戦後）までであった。昨年度の追・再試験では飛鳥時代が最も古い時代の出題で、幅広い時代の出題をお願いしたところであるが、今年度は本試験と同様、考古学の分野からの出題もあり、適切な範囲設定であった。

出題形式別では、正文の組合せが9題、正誤の組合せが6題、年代配列が5題、正誤問題（誤文）が4題、語句の組合せと人物・事項の組合せが各3題、正誤問題（正文）が2題であった。文章の正誤を判断する問題が32題中26題と多く、昨年度も最多であった正文の組合せ問題が今年度はさらに増加しており、正確な理解が求められた。また、年代配列が第4問を除く各大問で1題ずつ出題されていた点も昨年度に近い特徴であったが、今年度は史料を年代順に配列する問題が複数あったことが特徴的であった。

時代別では、昨年度に続き時代横断型の出題が最も多く、15題であった。各時代単独の出題は、江戸が6題、幕末が3題、室町と明治が各2題、古墳、奈良、平安、戦後が各1題であった。江戸時代以外は時代横断型での出題も多く、時代横断型も含めて全く出題されていないのは、旧石器、弥生、院政、戦国、織豊であった。時代横断型も含めると、古墳時代や幕末の出題が多い印象を受けるが、全体としてはなるべく多くの時代について問うよう配慮された出題であった。

分野別では、複数分野にまたがる混合問題が17題と半分以上であり、時代横断・分野横断が中心であった昨年度と同様の形式が踏襲されている。混合問題も含めた分野ごとの出題数は、政治が23題、軍事・外交が13題、社会・経済と文化が10題であった。今年度は政治分野の出題が多く、政治史を軸とした通史学習の成果を発揮しやすかったと考えられる。

次に、各設問の詳細を見ていく。

第1問は、「祭礼と行事」に関する会話文を用いた出題であった。問1は1920年代半ばから30年代半ばの文化と、民衆の娯楽に関する空欄補充問題で、どちらも文化史の基本事項を理解していれば解答は容易であった。アのように空欄に文章を補充する設問は共通テストに特徴的な形式であるが、この設問ではアもイも文化史の用語の知識があれば解答可能になっているので、アは歴史用語を使わず文化の特徴などの理解を問う文章にしてもよかったのではないかと考えられる。問2は史料の年代配列問題で、ⅠとⅢは多くの受験者にとって馴染みのある史料で、時期の特定も容易であっただろうが、Ⅱを知っていた受験者は少なかったであろう。ただ、設問の下線部に「当時の日本」とあり、それが「1920年代半ばから30年代半ば」とであると考えれば時期が限定でき、さらに史料中に「満州国」の語があるので、満州事変に関する学習内容から十分推測可能である。Ⅰ・Ⅲのような重要な史料は普段の学習で繰り返し読んで特徴的な部分を覚えておきたいが、Ⅱのような史料は初見でも判断できるように作問されており、受験者に史料をひたすら暗記するような学習を求めないよう

配慮されている。問 3 は①と②が絵画の読み取りであるが、図 1 は「だんご」の「ご」の文字が隠れているなど、食べ物を売っていることがやや判別しづらいので、もう少し大きく掲載してもらいたかった。問 4 も a が絵画の読み取りで、音を出す道具を持っているかどうかの判断で迷った受験者もいたであろうが、b が基本的な知識を問う文章であり、消去法でも解答できた。c と d についても、史料 3 を書いたのがどのような人物かの知識がないと c の判断に自信を持っていないであろうが、史料 4 についての d の文章がわかりやすいので設問としては解答しやすい。問 5 は縄文・古墳時代に関する基本的な知識を問う設問である。問 6 は共通テストでよく見られる、メモからの出題で、知識を構造化していく学習の事例としても有益である。a～f は文章の内容に誤りはなく、時期の誤りでも判断できないため、難易度は高い。特に X は、「盂蘭盆」や「踊念仏」がどのような信仰や思想に基づくものかを考えて判断する必要があるが難しいが、X～Z のいずれも用語の暗記ではなく内容を理解しているかが問われる良問である。

第 2 問は A・B ともに日本古代の墓と葬儀に関するレポートをリード文とする。問 1 は古墳時代に関する基本的な知識を問う設問である。問 2 は I・Ⅲで人名を避けた記述をしているが、誰のことかを判断しやすい文章なので易しい。問 3 は、これまでのセンター試験・共通テストではあまり見られない出題形式であった。「a と c のみ正しい」という組合せはないものの、消去法が使えず a～c の文章の全ての正誤を判断する必要があるが、受験者にとっては自信を持った解答は難しかったであろう。特に a は、史料群 1 の「及び」「ならびに」の意味を正確に取る必要があり、史料の文脈を捉えるように読む学習が求められている。問 4 は史料の読解は易しく、求められている知識も基本的なものである。問 5 はリード文から得られる情報がなければ判断できない選択肢もあり、難易度は高くないものの、解答に時間がかかった受験者もいたであろう。

第 3 問は A・B ともに中世の日本列島の様子について調べる活動内容をリード文とする。問 1 は鎌倉幕府の成立過程に関する史料の年代配列問題で、第 1 問の問 2 と同様に、初見であろう I も時期を判断できるよう配慮されている。問 2 は南北朝・室町時代に関する基本事項が問われている。問 3 は国人一揆の史料読解問題で、基本的な知識があればいずれの選択肢も判断しやすい。問 4 は中世の北方地域に関する基本的な語句を問う設問である。問 5 の X は、史料 2 を単語だけ拾って読むと迷う内容で、工夫された誤文である。Y は表の情報から推測できるため、「考えられる」という表現で正しいと判断できるが、表の情報だけでは他の可能性も排除できないため、深く考えるとかえって迷うであろう。昨年度の本試験第 3 問の問 3 のような答えにくさがあった。

第 4 問は江戸時代の自然と人との関係をテーマとする出題であった。問 1 は江戸時代の開発に関連して政治分野の知識も問う設問であった。問 2 は江戸時代の文化に関する基本的な事項を問う問題である。問 3 は ア が絵画の読み取り問題で、肥料や、入会地の利用法、といった知識があれば解答しやすい。なお、絵画中には、刈り取った草と思われるものを馬に乗せて山を下る様子が描かれていることから、刈り取った草は山から持ち出して何かに利用するのではないかと推測することも可能であり、その部分を活用した出題があってもよかった。問 4 は国役に関する史料読解問題で、現代語訳されているとはいえ、特に Y に関する内容を読み取るのがやや難しかったであろう。国役についての知識と史料の正確な読解の両方が求められた良問であった。問 5 も史料読解問題で、a の「物価の引き下げ」の部分が、史料のどの部分をどのように誤解することを想定して作成した誤りなのかがわかりにくかった。b が 3～4 行目の内容に関するものなので、a は 1～2 行目を中心とした内容の誤読を想定した誤文にした方がよかったであろう。

第 5 問は「日本史 A」第 2 問との共通問題で、東京に着目した時代の変化に関する会話をリード文とする。問 1 は幕末の年代配列問題で基本的な内容である。時期を特定しやすくなる事件名などの歴史用語を避けた記述により、易しすぎず難しすぎない難易度に落ち着いている。問 2 は X が史

料の読解、Yが知識を問う設問となっており、いずれも適切な難易度である。問3は明治時代の外交に関する基本的な知識を問う設問である。問4は史料と絵画に関する設問で、aは天皇の東京行幸などの新政府の初期の動きが戊辰戦争と並行して行われたことを認識している必要があり、分野を跨いだ理解が問われている。bは近代に関する設問の中で、錦絵が江戸時代の文化で学習する事項であったこと、つまり開国よりも前であることに気付く必要があり、時代を跨いで必要な知識を引き出す力が求められている。dは図の説明文に関する文章で、絵画の内容とは関係がないため、図を掲載する意味が無いように感じる。図として掲載する以上、少しでもその内容にも関わるよう選択肢の文章を工夫してもらいたい。

第6問は「日本史A」第4問との共通問題で、銅像の歴史に関する会話をリード文とする。問1は「ア」が年号の知識、「イ」が文化史の人物に関する知識問題であった。年代を正確に知らなければ解答できない設問は共通テストではあまり出題されていない印象があるが、大日本帝国憲法の発布のように非常に重要な出来事の年代はある程度覚えておくべきであろう。問2は問題文に「明治・大正期の出来事について報道した新聞記事」とあるが、問われている「報道が発表された時期」はⅠ～Ⅲのいずれも大正時代であり、紛らわしい問題文であると感じる。Ⅱに明治の内容が「十年前」のこととして書かれており、その内容がⅡの時期判断に必要であるため、問題文にもそのように書く必要があったのであろうが、Ⅰ～Ⅲのどれかは明治の出来事であると誤解した受験者もいた可能性がある。「報道が発表されたのはいずれも大正時代である」などの説明を問題文に加えるなど、表現の工夫をお願いしたい。問3は史料問題であるが、史料の内容ではなく、井伊直弼に関する基本的な知識を問う設問である。史料を読まなくても解答できるのであれば史料を掲載する必要もないため、第5問の問4と同様に、史料を掲載するのであれば、a・bかc・dのどちらかは史料の内容を読む必要がある選択肢であるとよかった。問4はa・bが史料の内容、c・dが板垣退助に関連する基本的な知識を問う設問である。問5は戦中・戦後の知識を問う設問で易しい。②と③は、「独占禁止法」「段祺瑞」が、問題文の指定する時期と異なる上に、文章の内容も誤っており、誤りの要素が二つあって判断しやすかったため、どちらかの選択肢は誤りの要素を減らしてもよかった。特に戦後の出題が少ないので、②は独占禁止法の内容を正しく書くなど、判断の難易度を上げてよいと思う。問6はXが大正時代の基本的な知識で、Yも史料が読みやすいため解答しやすい設問である。問7は戦後の社会経済・文化を問う設問で、高度成長期までの学習で解答可能である。本試験では高度成長後の単元に関する出題もあったが、追・再試験ではこの設問が最も新しい時代に関する設問なので、石油危機後の社会経済など、高度成長よりも後の単元に関する選択肢が一つはあってもよかった。

3 総評・まとめ

来年度から共通テストで「日本史探究」の出題が始まる。これまでの日本史単体の出題から「歴史総合」との組合せの出題に変わるが、共通テストではこれまでも新学習指導要領の内容を意識した出題が多く試みられてきている。来年度以降も新しい要素を入れつつ、これまでに申し述べてきた評価・意見も参考にさせていただき、良質な作問を継続していただけると期待している。

「日本史A」では本年、貿易・経済の変遷やテーマ（印刷・出版、東京、銅像、都市居住）で見る近現代への理解及び思考力が問われた。日ごろの学習とは異なる捉え方や切り口で興味深く、かつ幕末期から1980年代において各分野にわたりバランスの良さが感じられる出題であった。史資料の精選にも一定の配慮が窺われ、難易度も総じて易しく、受験者が取り組みやすい試験であったと考えられる。一方、史資料については、写真・絵・図などの視覚資料が少なく、用いた史資料の内容に関わりの薄い出題も散見された。受験者において、資料集などの視覚資料を活かした学習への

意識が高まった昨今だからこそ、本テストで多様な史資料を読み取らせる意義を一考しても良いのではないか。加えて、大問や小問どうしで解きやすさの違いがはっきりしていた。特に、史資料の読み取りや思考力を求める良質な出題に比べ、基本的な語句や事項ですぐ判別できる平易な出題がやや多かった。来年度以降においても、受験者が歴史を学んだ意義が感じられ、培った学力を遺憾なく発揮できるよう、史資料の意義を活かした出題や各問の難易度などに引き続き配慮・工夫をお願いしたい。

「日本史 B」は、全体的に分野や範囲、難易度の適切な出題であった。これまでに改善をお願いしてきた、日本史の知識なくても正解できるような設問が見られなかった点は評価したい。一方で、史資料を読む必要のない設問があるなど、史資料の活用方法で改善の余地がある。「歴史総合」や「日本史探究」でも史資料を重視した出題が続くであろうが、知識をもとに史資料を読解し、思考する学習の成果が得点に反映されるような出題をお願いする。